

# 明治学院バッハ・アカデミー会報（第1号）

## 巻頭言

芸術監督 樋口隆一

「明治学院バッハ・アカデミー」の10年の活動(第1期)に一応の終止符が打たれたのは2010年3月、最後の演奏会はブラームスの《ドイツ・レクイエム》でした。年間6回の定期演奏会を10年続けたわけですが、事務局を務められた学校法人明治学院法人課の皆さんのご負担も大きく、なによりも会長を務めて下さった学院長の任期も終わることから、ここで一旦終止符を打とうということになったのです。小さく始めた頃は問題なかったのですが、2008年2月の《マタイ受難曲》演奏会には、定員の2倍近い申し込みがあり、急遽2回公演を余儀なくされました。小さなチャペルを会場とした演奏会シリーズを続けることには無理があると悟らざるを得なかったのです。

定期公演は終わったものの、毎年の恒例行事である「クリスマス音楽礼拝」もあり、合唱団の活動は継続されました。オルガンを中心とした「明治学院チャペルコンサートシリーズ」(年3回)も始まり、その中でブクステフーデの《われらがイエスの四肢》を上演することもできました。2010年8月には「明治学院小諸音楽祭」も開催、2012年4月には、福岡の西南学院大学で「教会音楽の調べ」、2013年からは宮城県白石ホワイท์キューブでのジョイントコンサートが始まるなど、活動は日本全国に及び始めました。



ブラームス《ドイツ・レクイエム》直前練習の後で

海外の理解者の支援も忘れてはなりません。古い友人であるウィーン楽友協会のオットー・ビーバ博士とは、2011年・12年、サントリーホール主催のオルガンレクチャーコンサート「ウィーン音楽散歩 I、II」を共同企画し、ハイドンのオルガン・ミサ曲を中心に、サリエリ、カルダーラ、シューベルト、ブラームス、ブルックナーなど、ウィーンの教会音楽の粋を体系的に日本に紹介するという興味深い仕事を成し遂げることができました。もうひとりの主役である元ウィーン・シュテファン大聖堂オルガニスト、ペーター・プラニアフスキー氏の名人芸は、私たちに大きな刺激を与えてくれました。

2013年11月のヨーロッパ演奏旅行も、ベルリン在住の「新ベートーヴェン全集」元編集主幹エルンスト・ヘルトリヒ博士の招待がきっかけでした。ベルリンのコンツェルトハウスを会場に、ベルリン・コン

ツェルトコア合唱団・管弦楽団とともに「日本の響き、ドイツの響き」と題して、山田耕筰、高田三郎、バッハ、ベートーヴェンを上演できた感激は、私たちに大きな自信をもたらしました。さらにブリュッセルの王室礼拝堂では、王室オルガニストの綿谷優子先生の企画で、ベルギーの古楽アンサンブルとバッハの《マニフィカト》を上演することもできました。

サントリーホールでの初の自主公演としてバッハの《ロ短調ミサ曲》を歌うことは、イギリスを代表する世界的テノール歌手ジョン・エルウィス氏との約束でもありました。2008年には《マタイ受難曲》の福音史家、2009年には《メサイア》を歌って下さったエルウィス氏は、定期公演の終結を惜しまれ、「いつか《ミサ曲ロ短調》と一緒に歌いましょう」という大きな宿題を出して下さっていたのです。

こうして迎えるサントリーホールでの《ミサ曲ロ短調》。明治学院バッハ・アカデミーの新たな門出となる演奏会にしたいですね。



## 「日本の響き・ドイツの響き」

合唱団運営委員長 バス 高槻靖

2013年11月3日(日)11:00、ベルリンのコンツェルトハウス大ホールにて、ベルリン・コンツェルトコア及びオケとの合同演奏会「日本の響き・ドイツの響き」が開催されました。演奏会は日本とドイツの音楽の対比と繋がりをテーマに、前半に日本の作曲家による2作品、後半にドイツの作曲家による2作品を取り上げたものとなりました。日本の作曲家による2曲の演奏には、ベルリン在住の日本人女性による女声合唱団「アンサンブル和(なごみ)」も加わっていただきました。この合同演奏会をご提案くださった「新ベートーヴェン全集」元編集主幹エルンスト・ヘルトリヒ博士、及び約2年間にわたり演奏会実施に向け後援申請や様々な準備をしてくださったコンツェルトコア団員の皆様に深く感謝いたします。

演奏会前半は、樋口先生の指揮による、山田耕筰作曲の《秋の宴》と高田三郎作曲の《水のいのち》の演奏でした。

《Die Herbstfeier(秋の宴)》は、山田耕筰(1886-1963)により1912年にベルリン王立高等音楽院の卒業制作として作曲された、メーリケの詩による管絃楽伴奏付き合唱曲です。1918年10月にカーネギーホールで山田耕筰指揮、特別編成の管絃楽団とニューヨーク合唱協会により初演(英語)されています。日本では1935年に初演されていますが、その後1983年まで公式演奏記録は無く、また英語での演奏でした。ドイツ語での演奏は2000年の日本合唱協会第118回定期演奏会において、ピアノ伴奏によりなされました。こうして見ると、今回の演奏会が公式にはオリジナルのドイツ語・管絃楽伴奏による初めての演奏であったと思われ、意義深いものとなりました。合唱団では2011年から練習を始めていましたが、ようやく演奏ができました。ピアノ伴奏譜ができていますので、日本の合唱団でももっと取り上げられても良いと思います。

《水のいのち》は、高田三郎(1913-2000)による日本の代表的な合唱曲の一つで、TBSの委嘱により作曲され1964年に初演されました。日本では、合唱をしている者は一度は歌っているのではな

いかと思われるほどポピュラーな曲ですが、ドイツでは全曲通しての演奏は初めてであったかもしれません。オリジナルはピアノ伴奏ですが、今回はトーマス・マイヤー＝フィービツヒの手になるオーケストラ版での演奏となりました。オリジナルのピアノ伴奏と比べると、ハープやパーカッションも加わって壮大な伴奏となりました。一方、合唱譜はもちろん日本語(ひらがな)で書かれています。このままでは、コンツェルトコアのメンバーが歌うのは大変なので、東京側でひらがなをローマ字に置き換えた楽譜を用意し、それをベルリンへ送って練習していただきました。コンツェルトコアの皆さんは日本語の歌はほぼ初めてであったようですが、日本人にも違和感の無い素晴らしい演奏となりました。合唱団の伴奏ピアニストである稲川さんや、アンサンブル和の皆さんのご指導の賜物と思われまます。よくある演奏よりもゆったりとしたテンポで、たっぷりと歌いましたが、変拍子の箇所等はどうしても入りが乱れてしまったのは残念でした。それでも、ドイツの伝統的な音楽とは異なるこの曲は聴衆に最も好評だったようです。

後半は、コンツェルトコア音楽監督 Jan Olberg 氏の指揮による、バッハの《マニフィカト ニ長調 BWV243》とベートーヴェンの《合唱幻想曲 Op. 80》の演奏です。

《マニフィカト》は、新約聖書に記されたマリアによる神への感謝の祈りです。バッハがライプツィヒのトマス・カントル(聖トマス教会合唱長・音楽教師)となった 1723 年に初演された初期稿は変ホ長調でしたが、1732-35 年頃に完成した最終浄書稿はニ長調となっています。今回の演奏は、一般にも多く演奏されている最終浄書稿によります。明治学院バッハ・アカデミーでは、2000 年 12 月の第 6 回定期演奏会「待降節音楽会(礼拝形式)」において、初期稿をクリスマスの挿入歌付きで上演しています。私はこのときはまだ合唱団に加わっていなかったため、演奏旅行前のチャレンジコミュニティ大学演奏会と合わせて、今回が初めての演奏となりました。今回、指揮者の Olberg 氏がとても速いテンポでの演奏を要求し、オケあわせでもどのような演奏にしたいのか情熱的に指導してくださいました。ドイツ語で何と言っているかは直接はわからなかったのですが、どうしたいのかは理解できました。本番でもテンポについていこうと必死でしたが、大きくくずれることも無く、引き締まった良い演奏ができたものと思います。

《合唱幻想曲》は三部構成で、導入部はピアノ独奏、主部はピアノと管弦楽、終結部はさらに独唱と合唱が加わって「音楽の力と愛が結びつければ、神の恩寵が恵まれる」と歌われます。明治学院バッハ・アカデミーでは、こちらも 2007 年 3 月の第 43 回定期演奏会でベートーヴェンの第九交響曲とあわせて演奏したことがあります。今回、ピアニストは当初コンツェルトコアの伴奏ピアニストである稲川友希さんが担当する予定でしたが、病気のため急遽 Adrian Pavlov 氏に交代となりました。曲の前半はピアノの独壇場です。美しい音色で輝かしい演奏をしていただきました。

国内の演奏会とは異なり費用も時間も多く必要となるため、当初はどれだけの団員が参加できるか不安でしたが、最終的にはベルリンでの演奏会には 39 名が出演することができました。現地ではわずかな時間でオケあわせ、ゲネプロをこなしてすぐに本番という状況の中で、緻密な演奏をするのは難しいですが、それでも全曲を合同で歌うべくドイツと日本でそれぞれ取り組んできた練習の成果のもと、声を合わせて一つとし、ないうるベストの演奏ができたと思います。この演奏会に関わられた全ての方に感謝します。



オケ合わせ会場最寄りの駅にも、今回の演奏会のポスターが掲示されていました。ポスターの「絆」の文字は、樋口先生の直筆です。



オケ合わせ前にご挨拶。樋口先生及びコンツェルトコア団長のHartmut Grethenさん



演奏会場のコンツェルトハウス(ホール)



演奏会場のコンツェルトハウス(外観)



## プロテスタントブリュッセル王室礼拝堂 **Chapelle Royale** での日本-ベルギー音楽交流: バッハ《Magnificat》と木下牧子《光はここに》

バス 皆川公一

11月3日(日)のベルリンのコンツェルトハウス大ホールでの演奏会を終えた後、樋口先生、光野先生ほか合唱団メンバーと同行家族は、ブレーメン経由チャーターバスでブリュッセルに移動して11月6日(水)にブリュッセルに入り、11月8日(金)夜8時開演のプロテスタントブリュッセル王室礼拝

堂 Eglise Protestante de Bruxelles (王宮の左隣にはカトリックの聖堂が付設されているためこう命名されています)での演奏会に備えました。

この演奏会は、同礼拝堂の主席オルガニストを勤める綿谷優子さんのご縁とご尽力で実現しました。綿谷さんの夫君で永年に渉りベルギー王立ブリュッセル音楽院のオルガン科教授として活躍される傍ら王室礼拝堂の主席オルガニストを勤められた、故 Allen James 氏 (1947-2006) の教会公式の年 1 回の追悼演奏会として企画され、綿谷さんを中心に多くの教会関係者の方々のご尽力でベルリンに続く演奏会として実現しました。綿谷先生はじめ教会関係の皆様、共演頂いたベルギーの演奏家の皆様に、改めて深く感謝を申し上げます。

会場となった礼拝堂は、ロワイヤル広場に面する壮麗な王宮の右隣に隣接し、近くの階段を、楽器博物館やマグリット美術館の横を数分下ると、市庁舎のある繁華街グランプラスに着くという、素晴らしい立地にありました。

当日は、開演前から時折強い雨の降る生憎の天候でしたが、礼拝堂の一階席を埋めた聴衆を前に、演奏会は、綿谷さんによる J.S. バッハのオルガン曲《パッサカリアとフーガ BWV582》の独奏に始まりました。私たち合唱団は、前半は木下牧子さん作曲の《混声合唱とオルガンのための「光はここに」から》を 2 階回廊に演奏台のある大オルガンの伴奏で歌い、後半は 1 階に下りて地元ベルギーの管楽器奏者 Guy Lardinois 氏が主宰する Le Florilège Musical 合奏団と Chantecité 合唱団と合同でバッハ作曲の《マニフィカト 二長調 BWV243》を演奏し(綿谷さんも 1 階に設置した小型の、やはり歴史的オルガンで合奏団の一員として演奏)、アンコールにはメサイアから《ハレルヤコーラス》を、演奏者+聴衆全員が一体となって演奏し、大いに盛り上がったところで夜 11 時頃終演となりました。

終演後は午前 1 時を過ぎるまで、教会関係者にご準備頂いたシャンパン、ワインそれに日本から持参した日本酒「新政“6”」とクラッカー・チーズなどをつまみに、『日本ベルギー音楽交流』に相応しい演奏者、教会関係者、日本から同行した家族が一体となったレセプションを行いました。散会後も、一部合唱団メンバー有志・家族は、綿谷さんを囲んで雨上がりの石畳の道を 5 分程歩いてグランドサブロン広場の深夜パブに入り、閉店時間まで 2 次会を楽しんだ後、三々五々グランプラス広場にほど近い宿泊先のホテルに帰り、長い一日が終わりました。

翌 9 日(土)は、月曜日からの仕事に備えてこの日に帰国の途に就いたメンバーを除き、終日自由行動。希望者は、ブリュージュへ電車での日帰り観光に参加しました。また、王室礼拝堂に近い楽器博物館の見学を希望したメンバーは、綿谷さんにご紹介頂いたブリュッセル在住のバロック・ヴァイオリニストの土倉政伸さんに丁寧なご案内を頂いたのち、楽器博物館最上階の見晴らしの良いカフェテラスでランチを取り、有志は礼拝堂に戻り、綿谷さんの引率で翌日の日曜礼拝に備えた内部清掃奉仕を経験させて頂きました。夕方からは、市内に軒を連ねるチョコレート店でお土産を買ったりレストランに寄ったり、また夜は、希望者は綿谷さんとともにブリュッセル・モネ劇場の前衛ダンス鑑賞に向かうなど、それぞれが思い思いにベルギーの週末を愉しんだと思います。

私は、日曜の早朝の列車でパリ経由帰国したので参加出来ませんでしたが、日曜朝 10 時半から

行われた日曜礼拝と洗礼式に参加し、バッハのコラールや讃美歌、木下牧子さんの曲を演奏したことも、参加者には忘れ難い経験になったようです。朝からの雨が礼拝中に上がり、《光はここに》を演奏中に、礼拝堂の高窓から日差しと虹が見えたのは神秘的体験だった、と話してくれるメンバーもおります。

礼拝の後、希望者は、急行列車で1時間ちょっとのアントワープ王立オペラ劇場に足を延ばしてオペラ《トスカ》を観劇したり、綿谷さんとランチを食べるなどして、今回の演奏旅行の最終日を満喫できたようです。

今回、この雑文をまとめてみて、綿谷さんになんと多くのご尽力いただいたかと改めて思います。綿谷さんのお母様と私の母が自宅や年齢も近い大変親密な従姉妹関係にあったことから、合唱団のブリュッセル公演プロジェクトは始まったと思いますが、年間100回という教会行事やヨーロッパ各地での演奏会の合間を縫って、準備やお世話を進めて頂いたことに感謝が足りなかったと、痛感している次第です。

私事が続きますが、ベルリンに向かうため羽田空港に向かう第一歩で、自宅玄関先で転倒し、左肩を骨折し、それを押して「東京～ベルリン～東京～ブリュッセル～東京」という日程を強行しました。いまだにリハビリを続けていますが、予定通り参加し思い出を共有できたことを、樋口先生はじめ先生方、合唱団のメンバー諸兄姉、家族、現地の方々すべてに感謝しております。



演奏会の様子(二階バルコニーより)



ブリュッセル王宮 半円に凹んだ入口から右の部分が王室礼拝堂



## ウィーン音楽散歩 I、II

バス 大谷浩史

私達明治学院バッハ・アカデミーは、2011年と2012年の10月に、サントリーホールにて「ウィーン音楽散歩 I、II」というコンサートを開きました。ウィーン国立音大教授・シュテファン大聖堂オルガニストのペーター・プラニアフスキー氏とウィーン楽友協会資料室長のオットー・ビーバ博士を迎え、楽友協会の貴重な資料を基にウィーンで活躍した作曲家のオルガン作品と合唱曲を楽しんでいただくレクチャーコンサートです。

サントリーホールは、2006年からウィーン楽友協会と提携し、双方のプログラムやアイデアを互いに活用して日本とオーストリアの音楽文化の発展につとめる取り組みを続けています。バッハ・アカデミーの樋口先生は、バッハだけでなく新ウィーン楽派の中心人物アルノルト・シェーンベルクも専門に研究されており、ウィーン大学音楽学研究所に客員研究員として派遣されたりオーストリアの学術芸術功労十字章を授与されていて、ウィーンとは深いご縁があります。バッハ・アカデミーがサントリーホールで歌えるのもそのご縁によるものです。

ビーバ博士と樋口先生とでじっくりと選ばれた教会音楽を中心としたプログラムで、ウィーンと関わりがある作曲家を中心に、あまり一般にはなじみのない作曲家や作品にも焦点を当てて、演奏の前にビーバ博士が直接ご自分の言葉でじっくりと解説されました。シンフォニーやオペラといった華やかな音楽史に彩られたウィーンとは全く違った歴史があることが実感をもって深く理解できる、素晴らしい構成だったと思います。

特に2回目の2012年は、楽友協会が1812年に創立されてちょうど200年の節目の年にあたり、私達のコンサートと同じ週にウィーン・フィルハーモニー管弦楽団メンバーによるサロンコンサートや、小ホール「ブルーローズ」にてウィーン楽友協会アルヒーフ資料展「ウィーンに残る、日本とヨーロッパ450年の足跡」も開かれました。明治の初め頃に来日し西洋音楽の教師として活躍したルドルフ・ディットリヒが収集した楽譜や絵画、文献などを中心に、楽友協会資料室に残る日本関係の資料を集めた興味深い展示で、ブルーローズに宮廷のような展示室を組み立ててその一角ではミニコンサートも開かれ、偶々聞くことのできたハイドンの弦楽四重奏曲も生き生きとした演奏で楽しめました。

「ウィーン音楽散歩」では2回とも、ハイドンのミサ曲からの抜粋を演奏していますが、2011年は《小オルガン・ミサ Hob. XXII-7》、2012年は《大オルガン・ミサ Hob. XXII-4》で、プラニアフスキー氏の演奏でサントリーホールのオルガンが大活躍しました。

2011年に演奏したアントニオ・サリエリのモテット《おお主よ、なんと心地よきことか》は、楽友協会に保管されている自筆譜からこのコンサートのために楽譜を起こしたとのことで、日本初演だそうです。曲は何となくハイドンをもっと簡単にして一般受けを狙った感じで、所々に大げさなカデンツァがはさまって(歌舞伎で見得を切るみたいな)やや大仰な印象ですが、題名の通りたいへん甘美な響きを持つ耳に快い曲です。当時はこのような作りの方が大受けしたのだと思います。ビーバ博士は、モーツァルトとサリエリでは立場的にはサリエリの方がずっと上で、二人は実際には仲が良かったと解説されていました。

2012年に演奏したモーツァルトの《テ・デウム K141》は、オリジナルの歌詞はラテン語なのですが、

この演奏会ではドイツ語で歌いました。使った譜面は1830年に行われた旧楽友協会ホールのこけら落としの演奏会の時にH.クロディウスによってドイツ語訳された版で、楽友協会から送られてきたスコアから合唱団で声楽パートを起こしたものです。この形では日本初演のはずです。

このコンサートで一緒に歌ったサリエリやフンメルも技術的には平易に書かれています。同様に響きの美しい佳曲で、最近再評価の動きがあるのもうなずけます。こちらも楽友協会資料から2012年に譜面になったばかりのもので、2012 Gesellschaft der Musikfreunde in Wien と入ったスペシャルエディションです。もちろん市販されていません。こんな貴重な資料に触れる機会をいただき、しかも一流のホールで演奏までさせてもらえるとは、なんと恵まれた環境にあることでしょう。

2013年は、11月のはじめにベルリン・ブリュッセルへの演奏旅行があり、2014年10月はバッハの《ミサ曲ロ短調》の公演があって、「ウィーン音楽散歩 III」はまだ実現していません。もし具体化されるならば是非また参加したいと思います。



ウィーン音楽散歩(I)リハーサルの様子



左から、樋口先生、プラニアフスキー氏、ビーバ博士



(事務局だより)

ロ短調ミサ曲 チケット好評販売中です！

日時・会場：2014年10月13日(月・祝) 13:30開演 サントリーホール 大ホールにて

曲目：J.S. バッハ 「ミサ曲ロ短調」 BWV232

指揮：樋口隆一

ソリスト：S1:光野孝子、S2:林美智子、A:寺谷千枝子、T:ジョン・エルウィス、B:クリスティアン・パルム  
維持会員の方には、招待券を1枚お送りいたします。また、本公演のチケットを維持会員特別価格にてご購入いただけます。

サントリーホール、またはお近くのプレイガイドでもお求めいただけます。

ホームページ：<http://www1.m.jcnnet.jp/bachakademie/>

明治学院バッハ・アカデミー維持会報 第1号 2014年8月31日発行